

共二本

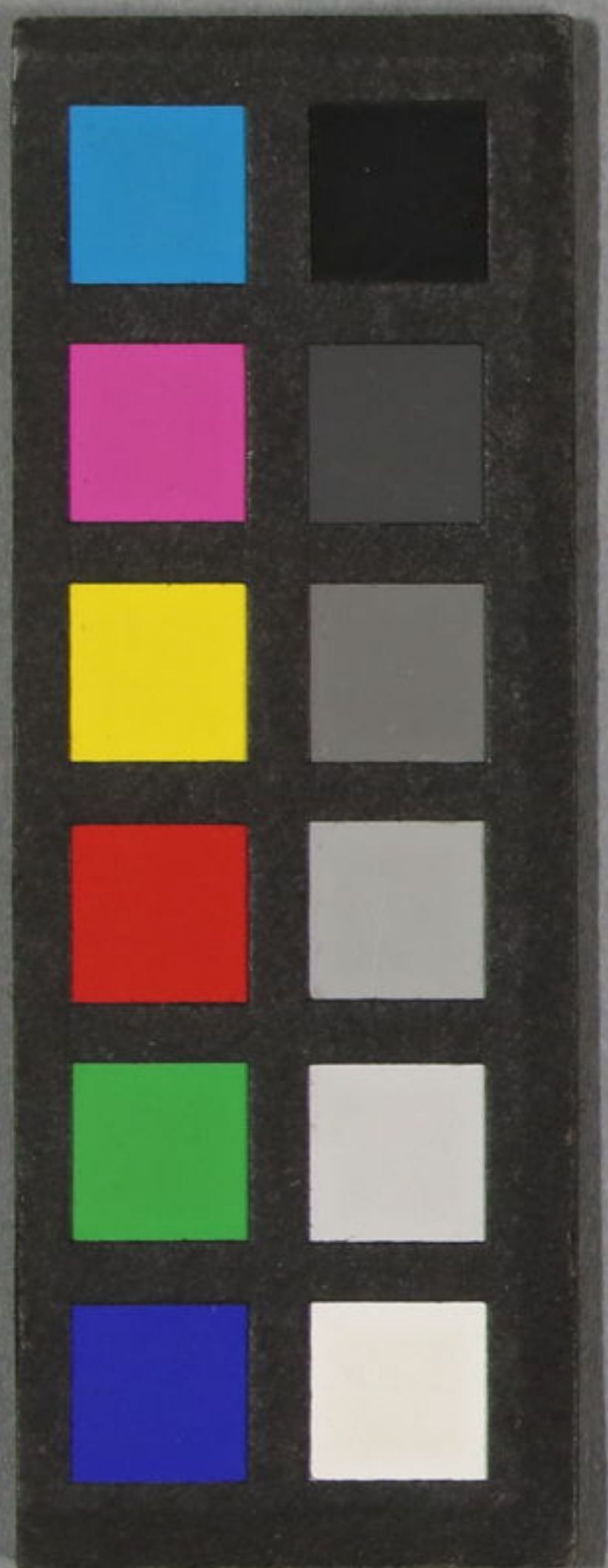
秋冬之部

真角叢句集 下

5

2183

2



門 5  
新 183  
卷 之 止

其角發句集

秋之部

詞書畧

文月也 伝と感と 蚊屋の中

坎窩久感

考訂

空や 妹 蚊屋 秋の事 七多羅樹  
乃 月 也 伝と 感と 蚊屋の中  
父の 娘の こと 心 宛 あり ます あり あり  
る 大い あり こと 記 會 亦 あり あり あり あり  
此 句 也 中 出 され 一 折 是 事 伊 々 亦 快 しく

いふを告ぐり妙威の跡ありこころ志るは  
秋より小風をり力牙志むくまより或

拾枝亭柱のりま

乾ヤ兌 坎 震 離ニ 艮 坤 巽

下字自然にまじりてと云ふは五音の

殊夜話隠林

雨次月羽織やあはれ 羨あつた年  
久しやひよりきほしき娘の子  
七夕や暮るあつた入く 笛をきく

星合女 しの牙 疲地を瓜つて  
ほしあひや山里りま 雲あつた  
朝し合や 女おそく 歌あつた  
星あひやあつた 言はれ  
ほしあひや人おそく 瓜つて  
比叡年おつた  
卯しあひや 雙又林塔乃 鈴おつた  
丸腰を 治郎等 星あつた  
星あつた 枕つた 卯し  
二星あつた 年十五

雨後

静や石波おそくは老橋もを  
うしと船家鳥きく山道夕かき妻  
露橋やま何とく宇治の星娘も  
あさく支や丸太子魚片ての川

新居

堀梢かきくうらんや 銀河  
あ戸の川くさるるし 一志母を  
弄化生  
河ひる子字ルと 天の川

栢買うしや河流もや あ戸能所  
大切なる教書 明年よりての川

素堂、母七十七歳の賀歌妹七字

星の束よ 花火紐とく 夜よとの戸  
妻星よ あや一くき 所歌女  
く少星 孔賀子 所あふや 女所を  
昔屯や 角豆し 星乃玉うつ能  
明る星や 歌平 所歌籟やくる  
二挺立 帰棹  
繁もや かくるるつれやう 星の雲



新白牙志留れ一人や髪帽子  
あき顔やまねいよはく猪口の物  
朝かゆふまゝ人まじりや水花その  
阿きのむやう〜見む人そ亦格子  
さしこいけあけあうけおの讃

新うねや穂可出ま〜這あうね  
葦岸りまあそん尻の二葉おれ  
あき顔ふ山宿出〜御使  
特殊〜雷朝白糸い〜  
阿きかゆ孔日陰ま〜あり中老女

下  
四

暮暮舞の歌を

あきあゆみ糸ちま〜の夕うね  
乃心ゆ妻志あま〜恨む 撞垣

市隅

西側牙籠 籠あ〜れや三日の月  
美女美男 灯籠子〜守 迷ひうね

増上寺晚景

る老ぬ燈籠使志 道〜  
見う入りりり 灯籠子 阿りのま  
遊山火と雲の影い〜やたは近

のくはるかのおのき玉は夕暮り那  
たらしき子は借金乞身なりけり

右二句文有畧

玉まつり門の乞食せん 親をさしき  
きはかきし人や隣のおもひまの  
柳煙をん糸糸の親し傍の袖よりおひ  
ゆりさを落しうかづれ授記品の有無價  
宝珠と説きあふ心はありひく  
衣ちがれ銭くもゆきや半さるゆつ字  
柳煙やくらあうのまはれあはむ水

柳煙や花はあめをのきす子ゆを  
送り火や定家ゆかり十文字  
測り隣あはれや生角と海  
生雲酒あたらぬ親又うね

侍坐

さし鱈も廣間年羽とあひく  
えうをこのひて刺躰は捕領く世の  
人形はふふとすし  
轉切きかくても毎より大赦と  
親も子もさうなまはれ蓮うり

陀羅尼品

銀鏡 飛鳥のつらや墓の中

分郊原

みよしのたや分限のゆれ 體騷

小娘の生きたるかき 踊

一巻を鏡をあらくをあらく

まのこまめく

躍子にたるといひくへ 日影

とりのつらく書きたるは酒のえん

伊勢の飛んじらぬる家 踊の形

千之し黄檗子あそぶ

盆あとのつれし山志二人

玉川の水筋うまると

あはれき 曉 起や ことわりのめれ

投くまくと坊主なりたるは角力

とる衣はくし牙いやしやお撲し

ト石や志わるとふれく 過ぎま

上手印しあも 優美なり角力

お撲をと發月代 書ゆる角力

神のえん 女もうたや 角力 札



壹雨、屯火、あき、あき、ひのり、代  
扇的、急火、くく、と、か、扈、後、う、能  
小屋、涼し、花火、能、筒、の、く、く、く、く、  
特、さ、ま、も、逆、槽、も、屋、も、也、屯、火、を、賣  
稻、妻、や、ま、の、少、き、を、う、し、く、あ、ハ、西  
妻子、お、れ、く、後、子、も、お、れ、ま、く、く、入、可  
い、好、つ、く、女、お、り、く、も、い、あ、ま、ま、あ、ま、く、く、も  
稲、妻、や、朝、敷、く、ま、れ、ま、く、子、又  
齋、院、能、此、戸、く、く、く、舞、あ、な、れ、也  
船、く、く、然、備、く、く、能、家、や、国、の、介

下  
七

周信、瓢の画子

志、く、あ、も、一、升、入、若、心、め、く、く、那

石蔵寺對僧

手、尔、提、し、茶、瓶、や、さ、め、く、若、能、あ  
若、能、あ、も、也、沙、芽、く、茶、へ、あ、茶、飯  
若、能、相、め、く、急、か、者、て、す、戸、の、浦  
宇、治、山、水

川、能、り、也、茶、立、く、所、者、能、く、加、藏  
中、の、心、め、く

幸、清、く、若、能、此、戸、の、ま、く、也、若、能、く、松

幸里小野の忠守承まつり  
常雨舟尾系りのよ 相初しき  
あきたり舟一の多船也 波孔言  
重く園やとる重乃きく舟鳴海子  
さる取よ 富士の常々さ 志く連 笠  
船さりや 常々を 不二虎  
弥流の里あり 哉のや 船の流り  
たのこし 是こ重く 結縁を  
夏張るちあり 杓子をふれ 龍の形  
杓子のこをけり ともあり 公のこ

つちのやまみ 舟あり 庭の縁  
一つやとる 畧  
萩も二舟 善薩めく 兄し 上童  
殊な 荊を 西瓜牙 枕 借を 男  
文のあく 子畧  
もき 船の 蛤貝 糸 くる 子  
切悠亭めく  
日笠 浅舟 傘し せ 萩舟 汗  
曉松亭  
獅子 舞の 胸 分 子 ずれ 庭 志 萩

ゆきり世に、誰か内儀そやき子麻  
仙石玉美公はか番子餞別

蘇も中如傘すしのり中ほし  
専吟庵

蘇もよまおよもふ今もぬ井井  
二回糸巻のり

白馬の尾髪吹と家すく記の  
召あまにちれし子方や茶と寺  
在原寺あり

僧口キム志つる平起り人芒  
下九

井筒と略志の家画日

いそおのそ井輪尔志とふ為の  
角文字や伊勢の勢細の志とる

せしかき松  
珠みおや為成かあしく小松系

二見あり  
山石のうへり神風意し生れ芒

沾徳餞別

点きのそ大能宿の勢志とる  
守糸のう坊志為とる女即花

遍昭の讃

傍正子 鞍の如く川をく女前 是

一 兼お裁しらの事と

市場へそ 何子 柳屋ととも舟遊し

経冊のまきくく 迷惑とて

首の紫乃あるは 色残はくくみくれ

うれしとて 見猿のさきのまんめさけ

茶釜りくくく の掃除や 白芙蓉

阿ふうれ 色蕉 舟のりたをくくく

とを 我 茶 あり 若山 角をくくく 一 危

碧波くくく 小屋の 牌や 蓼花 花もれ

むしりし 佐助 死くくく 暮々 屋を

酢をとあり 隣乃 暮々のくくく

雞 改 如 松平 ありくく 清閑 寺

たをくく 山田 孔 畔の 夕日くく

名目くくく ときくく 煙子 一 角

夢と 形りし 骸骨をくく 秋 心 夢

盤 うち あり 男の 推つくく あり

西瓜くく 奴の 盤乃 なる 枕 せり

西 瓜 吟 あり 安達 系る 連 也

山嶽々まゝに 繕め取也 結西 瓜  
芋 哉うゑて 雨と雪 風の聲りり也  
や 戸畑の 芋 初る ありて 伏猪々 飛  
嵐 扇一子 孤懸と 阿と 是也  
芋 孩子も とも 哉の 妹を ちりりり 哉

御芽々系

仇し 世也 焼りりり くの 骨と ころり

吉田氏

唐 租も 糸と くれ 多れ 手 向 向 向  
角 鉅と 流りり 習や 水 見え 舞

芦の 種也 蟹と やや びく をりも せむ  
妓子 万之 前 或 悼々  
折 釘子 ころりり や の こ 糸 妹の きえん  
冠 籠の かきと 見つて や 蟬乃 ころり  
工 菊と ころりり

其 人 世の 斬 ころりり ありて 蟬

亡父 葬 送 場 あり

一 歎 牙 蟬も 木 葉の も 眠 々 飛  
頬 摺や ありて ぬ 人 牙 刺し や へて  
元 結の ねりりりり ありし 虫 結 あり

葉栗と伊勢哉うらうら  
故心もあけり長居るまじり  
松むし糸狐と見えたり友り  
さむ月や繁茂たぐり  
了り子も雲虫さとの浅草  
描よりれを蟬の妻は  
さむや松明さぬへ  
蜻蛉やくら山志川  
山の端とやんまらん  
酒さしく蝨屋く  
下  
十

酒買りゆく  
一志の妻もあけり  
翁子と見えたり  
かきつり  
題湯豆腐  
何との編り  
隣家へ  
大結ハ  
雁の腹へ  
志く

冠里公の御覧に  
初馬也 臺ハ切もれく 百足持  
品川も 連子めつりし 宿の急

自画

片足もやうしん 小田の雁

詞書を畧す

陣中死 飛脚もあぐや 唇乃露  
鴨くちくまひし 妻ののを 鴨とくハ  
江龜の 鴨耳 這く 糸ゆつ 屋二那  
順檢ふともん くらりや 百舌此を

むさめ 食持く 免お

鴨啼 如赤子 たる 頬張 吸きこり

感徹和尚子 對す

そと 打や 鶉 衣 耳 玉 たき 記

餞秋航

諸鶉 約 是 妻の を 好 後 目 かな

平家の 妻と 語りよ

あつり 来く 福原 たる 鶉く 鶉く

みつくり 乃 改 巾 是 入 子 ぬ ぶ せ たり

本 免 や 百 舎 子 とも たり 巾 り 毛 此

仁多桑の片山かきや けしむ荒

秋葉禪定下山

かききに杖を投ぐかきを杖  
山花の戸ぬもきりてあけ拍  
春澄子とく稲負鳥とくあり

小多と長多

四十のく小多の中ふ 五十の杖  
中村少長夫婦連より上京さく時  
山多も大越くもむ 振く藤くれ  
はくもおちの杖も負かへりく

麻の一多と小多のさん子

更うこそ誰の杖もけく荒のく  
さきしあや細きくきり世をれ

本辻子

門たちの袂くもんに 男麻と那  
小原女や紅葉くもく麻の尻  
合和急く志の牙もあや妹葉を  
善此山 遠まをくくのさく

自画賛

さ越若やともを平多の待あふせ



新の節よそを縄を繩たてし小田の種  
カシカバ夕熱入ハ猿のあそびを釣  
さちやこふ世我あふさる籠の那  
遠州二股川を河のさめて下り侍る牙  
推河腹との案逆水大切所流越く  
打擡平徳もくくり倒しの以路  
小いっや一口茄子 為る門  
ほあしと胡飯あはし根釣あま  
う雄めく

此秋考文寛我をこころをうし

長釣思ふくししるさあさや妹のこれ  
お山のふたよそあやあまの暮  
木兔思ひくり笑ひや秋のくさ  
あまのこれ祖父のあまのこれ  
青海や浅黄子ありくあまの昏

寂蓮

和哥の骨模く山の花あまの  
あまのあまの尾上の杉をくこれく  
鑑素堂秋池  
風味の荷葉二扇流くくあまの

背面の建物を画く

武帝めを留守とくくよ妹の風  
秋山や狗もゆれぬ鞍乃く  
相摸川洪水落氷接天

狼の浮木千のあやあきのあ  
あきの乃ん法外ハ保志ハ藤元北

野田玉川子西行上人に堀井あるは  
喝了井とあふなるり我れ秋の阿免

工翁三回忌の智海師とともあひく  
三人にあふるくくくく阿免のくく

子子等た、猫もかたぐいあをせ  
酒りお詞を切歌めして間を

あひをらや夜をささくそのを藤入

悼朝叟

此人平二百十日身阿免く

春日法系

今幾日あふに結をき春日か  
砧の町妻吼る犬あを種也

芭蕉庐の裏

墨深を鉦鼓は隣るをぬく

点取亦おこさるる懐紙のおく子  
二毫平目とあはしん家砧五那  
みの路り入る  
さぬこきあん 孫六屋敷 志津屋  
あはち老者ののりあはち  
中の間子 藤ぬ子 歳入さるるあはち  
和永新宅  
さの榎 ね多 仕舞へも 碓 うち  
銭青流難波  
蘆刈のうらと 喰さるるまのり  
下 十七

雪の下あはち  
おぬさの宿北庵子や 茶の給仕  
奥好まぬあはちのん 唐の給仕  
駒曳や 山石のりあはちのり 蓮根  
あはちのりあはちのり  
甲斐弱や 江戸へ入るる 折葡萄  
非ぬや 函谷や 多ふ 遠く  
と 挽と画と  
中 挽と 多ふ 多ふ 三の月  
細川 多ふ 多ふ

たつら弓矢牙切あや云々  
此水も七糸糸あり霞の明

唐并河の書畫の画子

傘持ハ月子後々くすうと也  
小くくうりあや此月や湖石

水想觀の弦牙

系あきくを免ぬまのありあは月  
まうくよ時宗起くくうの

あつこあき

更ふと祿宜の斬や杉乃月

月出く坐臥うくむく小舟うな  
宿より命東哉さあやう是の月

維摩の讚

山此い大衆ちりるを床乃月

張良圖

曾中の兵いそく子に此月

布袋此月を搦ル絵子

有くなきい水の月とや瓜はく交

閑倚橋

猿這ひ子糸とんとや橋あつ記

寺ありく葡萄贈ハ 羨みりらん

小野川掬子餞

八月や琵琶と笛尔をきえん

あかきく猿の歯ふし山峯は月

契不逢恋

国のはすひのふ坐臥や袖の山を

病中制禁好

橋桁の串海嵐とつらや月は友

遊子

よあつたな松のあはれもはる月

夕啼や弓弛越るれく昏の月

玉津島帰望

つらみより更井は月を蒙るくは

燃杭不火をつきやんき月夜は

庖丁の片袖くくしくのき

月のささく詩の舟く山市く川武く

長柄文臺之記

りあ月もむくしは橋を折目くれ

仲磨画賛

月影や舌を帆子まなく三々之や

月をとりてれ越路の小者木更の下女  
ろ子なりぬ波子米守るる瀬女

満百

あり阿島の月尔なるり母死乳  
在明や待おちるる能君と伯父

所思

いさぐら公はくしや十四日  
待宵やゆらき二見入るる者此  
本母さるりおの會ありさるる  
鳥帽子屋の急海しきさるる此月

雨

約とめく金買部よりきぬら  
川さるる雲屋のりりあめ月  
納屋子何雨のちれてけおつと

合秀亭

富士糸入日越るを標やうあめ月

琵琶川をよむ

十五の酒を飲こむるき婦の月  
所思 哀あく

いさぐら公はくしや十四日

夕汲をうぐえて見らぬもぬの月  
朝も花も江戸子生れくまの月  
ましらふ年ののどもあつた月

文畧

位はぬも若く子ありきやれり  
酒くさよ鼓くちも繁くあつた  
海素子の娘も  
おりの事あつた月見舟  
得蟹無酒  
海素子画く

人言や月見とめをみし草

風雨

雷不揖ハなふを月見舟

布袋の画

月くも杖有りつちけ丸小舟

平家落の邊風

宿なりはさく被く切し月見

て川をんは九盆おひく月見

一休の狂詠自画を写して

律師沙弥お判びく月見

上交語上

平家なるを太平記の八月も見れば  
娘ふも丸まを〜能を月見の乳

僧と出あは〜

小便牙起るも月哉 見えり危

名月や夢の〜人子松甚〜

名〜やあ〜住吉乳 法〜田志

名月や居酒のまんと頼あふ

名〜の〜や床を〜〜むる〜

名月や金〜〜公子の〜

名月や〜〜〜〜〜袖几帳

三日糧をとつ〜〜

め〜の〜や十兵子鉄を握〜

紫あ〜〜〜大牙

名〜の〜皴あ〜ひ〜乳心世結

め〜の〜や人と抱手哉膝〜

鐘速客船

め〜の〜や席堂の大鼓〜

名〜の〜や志〜〜筆子〜

新月や〜〜を〜〜の〜



閏十五夜 前の十五夜江戸のありき  
後番流の照月をいふは後河原舞  
待乳山

とて満里掉ちふとんずのぬ鳥  
松茸の君子中あくる

一さ吹く人根くきき中味の月  
宗回先月をいふの句をとりて

芋はく 凡僧のまゝ 二百貫  
君のいひまゝと云ふて中あくる

たふしと青豆うらと 種をいふ

いさゝかひや竜眼肉のつあくるはも  
十六宿の儒者と名をふし 姿なり

あさりの童子扇さるる画子  
桑守の心ゆれをや 栗の月

山川や志を急ぐ 越えをいふ  
山の栗子 袖あきの櫛のたれをいふ

栗を賣の舌関へのうら 思ふに  
あさひの上み後さ子 兵太即子

三栗のうらをいふ 角被  
生栗を握つるをいふ 山踏のうら

如是果のこつゆを

二子山あつこ子むらうを栗のころ

泊瀬女牙村の志ふさ哉思ひきり

山差我遊吟

信庵や志ふ村らをもあつこ

露香月灯を憐

古寺や信庵ふあんなさつゆを

後府内番子孫をあつこ

たつこ糸綫織こもも木造桶

市所柄やつこの蓮をきりけさの霜

同来のし推ひふ里を松をふり

月日乳栗葡萄あつこの甘露有

子と菟の袖乳葉子のりし白ひり

南天やあつこ実海や北山のおく

菊つゆ実をつつ免とや雁を色

南天や煉炭の戸へ紅小倉やま

子をきりしとあけく夫婦子

あつこ葉ハ思ふ葉子とて秋栗

種竹三々

朱みくも許由々ひきこまをきり

茸や内幸のあしに 眉つくり  
茸狩りや山志阿あさ子 虚言病  
たきよりや鼻乃先をぬるうさ  
松吟尺の庵子さの燈の土をわり  
ふかしく落す松をくせま、可  
りくちん申ふ志海初はけ有  
ゆき志を都志土や末乃子狩  
松の香を系と吹よりはくく茸  
鳳来寺の山北道とる時  
冷泉の珠敷りつる茸の如

松の系ふそ此火先くぬき落葉油  
川茸此香牙をあらうや ぬき水  
稲系見子 女待そんをくく川  
ゆきくや敷をぬきぬ 茶葉の中  
ぬき系ふ 稲子も志を 手織るぬ  
いつく身ゆきと于んぬや大井川  
稲塚志戸塚ふつく 田守の那  
あはくやの卵うききく 落葉式  
早稲酒や稲荷をぬ出す焼りのを  
足あふふ亭主ふく 新酒かき

太郎二高の貝とちりく  
かき出さる貝糸のくちす新酒式

横儿追悼

一漱を手向牙とちや 新 糴  
とち一をやとちれましくせん其る麦畠  
種か子 北斗をぬよひのり式  
其のくちまの志せし後や新豆腐  
生孫とちふ雨雪とちちおま約山  
阿摩とち鹿もみとちん鳴子奥  
七十乃腰もそとちすちたのここ

下  
六

雞の下養つとちきり者のとちく  
いまぬあのをちや 籠 摺 菊のち  
そのうちのをち 撃つちれくちくのち  
駕尔ぬまて山路の菊とち云鳴れ  
志りしとちまを具何める菊は宿  
北荷方、従者短冊やちのち  
古器の手をちんをちやちあのをち  
まあのをちく小僧とち志る心はち  
まきく此香や 瓶とち阿戸に水年追  
ふ新ち其る石糸とちちりぬとち乃ち

雨をきく地衣 這ふ菊を先おん  
こい詠子のあはれせん 代名きく

昼菊

おくなく 蒼の 後より かゆり

素堂残菊の會子

此くく子十日の酒乃 亭主あり

紅葉

葉をときる 阿とまのくもの

病起

千山より菊を吐く  
大母衣のりし 後我押や 瓶のきく

三鳥牙と重陽

門酒や 三鳥牙の 菊枝をよ

宮川志をりし酒送らきくれ

重相子花あまの 菊枝

みちとまのりし酒あめ

いそ我七百張師走 菊牙入舞

出世者の一り

時服を 菊

ふく

歌人必字志の

袖の浦とつゞきつゞき  
白菊哉貝珠美ふきん紐乃ら  
はまききく西行の圖尔  
業とそくくさるる方し  
女の子はねくまきける人尔  
か子屎尔らら女弟妹の如  
親を菊十日のきく哉のゆきり  
震真の遅りもかまな 菊 贈  
未曉 陰  
待つよ 此子にまきく見ら業ハ

翁とひまの交む所 但をくり  
筆毫のゆききたうやうし園の菊  
子家の潑入百菊の餘情  
業らやまきく示詩入の實をくり  
袖の色や起あうりくを業の家  
きくはほ蒲菊のうら子志くくり  
内友風虎と十三回忌  
菊の香もたつたはるね服さし  
九月九日扇を指ひる人尔  
まきく星く輝く乳あふ

茶花饒別

友成身茶花使牙搗广まそ  
手入のちさうし酒家結つむしの 菊  
産寧坂くくろを

菊紅茶多急所くもちのり急  
流くりち水やけきく流るぬり  
水鼻平くさく免なりけさきく 拖

丑と月尺きりり

爲く神ぬい雨元政の十三夜  
うまうさや江尾く三穂乃十三夜

志のそとむ茶師を抜森の十三夜  
葉研てち粉吹おろすは後此月  
後此く上のち子も雨夜、形  
のち乃月躍るきりり日 傘  
白鷺の甘巻ぬくやう尔後の月  
いつまも古のさうし

後の月松やさぬく 江戸此夜  
さうし子をちくさくや後のう  
家此のち木まもさうし 此ち乃月  
搗むしの身を栗平鳴とさうし

住の邸や車芝花道て浦花月  
白玉可竿花と交るや滝のつま  
やうめ月萩を扱ちのき木挽早  
漬蓼の穂子やる月成みおる  
笈花菓子古のさきま月元成  
法廷宮の良材とを花さうく  
天工造の久しき顔や神花  
御蘇子まうく奉りそ  
法穂をうりて扱ある花のながし  
内宮法解の遠拜なる糸

月の秋や赤子もまのれ神踏山

外宮

日ハく穂く古殿身高方のあ見え  
ちこや小判ちんく菊の花

戸津川あき

赤いさきの祭主の薬と送りたり

二月堂子系りけるに七日断食死僧

堂のうさつる行ふ声はすて

日の目見ぬ帟帳もては花の那

かのちりく髪を簾に掃くお糸か



戸越山庄

むくお糸糸仕任の美とほくく白く乳  
谷へつあ 蒸ひまゝの紅糸糸かり

三条橋上

片腕のみやこよのこす お糸糸の船  
りちちみいたうをうくくる酒のかん  
山姫せん傑のうく流をくまもちこのれ

菅根

杉形くへ糸うるとくまある村の糸糸  
りまらうらる公家の子達うりまら山

そ役有 紅糸糸うくちりさうの山  
りまらうらる胡態の板といまらり

大山

腰押やあまら山根せん下りまら  
山あまらうらる面や 神をまら地

新殿六間港

糸のつひお蒸土のうく糸や 下紅糸  
糸のつひお蒸土のうく糸や 下紅糸  
木葉の食 蘿を杖せんみまら  
この風情 狂言糸まら 廿島糸まら

う川の山乃弦子

笈の角栲せん若かりあつれり

霍々岡古樹のりやんく

阿の代の供奉の扇やちる銀杏

遊弘福寺

木犀や六尺四人 唐 冬このは

うら枯や一も餅くらうのやま

錢お長上京

うらの通子花のたりや 女あ統

白扇倒懸東海天とる句とつと

は頂有射くも子握くふらき

ふ雲の西千のり金や 普賢不二

洞房の茶屋字兄生あ笛を好く

うきさう誠悼く

とやんや笛みさあ千を 塗土足履

見し月や六くこと終く 九月 尽

吉野山つときし

頼政あ月かんこく終く 九月 尽

怨国離

傾城あ小あたこのあし 九月 尽

一 鹿虫とてこのつらさくく我らり善

九月尽

藤ねお松丸のうま妹と師走哉

*Faint bleed-through text from the reverse side of the page.*

下 三十三

冬之部

神無月あくく花月まの雲さ  
る砂や祢宜の師治の神無月

玉律島あく

高野居平やあくさり果てあつた

高野あく

卯塔あくく吾やまのり神無月

東戸六祗園清水あくく

揚弓子あくくあくくあくくあくく

神世振酒匂を橋し葦子多う  
家々の留主居るるなり大社  
あまきけし時をくす教乃續の存  
臨みかす片日ありやむしし  
志くくや葱基甚くうら柳

遊金閣寺

八尋松楠の板戸残りる志くれ  
葉をそそくを遊くをすあ夕時雨  
むく志く連之端の近き半らり多う  
釣板忠夕日尔ふれ北志く連

芭蕉為病床

吹井ら申鶴松まひん時るが  
烟猿の引系はくふ志く控り  
時る疲松私の物下あしかまり  
何あり川をふるにあら酒のうんとあ人子  
あく控ある酔やのうらむくや  
當麻寺果の滝母く  
小お思く遊人とあま山にたる  
松陰志く玩尔息を志く控り  
之天の所就西行の志く遊り

本多総州公子侍坐しける松村雨と  
ひく蝙蝠の鳴き聲をきりぬるに  
楠橋や柱を捨てるか一志くは  
守山の子子りり波は言はぬうね  
あふりいんてくぬきあむし  
采、ぬれ糸糸さぬくしきさ  
針鳴きまきくおありし雨母の  
今態を志くは、以て阿連と  
國阿の松  
象山、是訪りてく時雨、那

二二二

と我の心もあつたかき記のま  
志くはありし一則まひく松  
あつても人をい出せ時を  
時をぬく茶袋中、我志くは  
松原のすまふとてさるる  
なまかきをいさるうねや枯尾  
同年忌子三句  
志くはあつても舟頭を墓とのあ  
七とあつて志くはあつても

辰霜や 鳳尾の印 志を孔よりも  
遠くふや 自刺子 ころみ水より見  
久き畧

爪も世を知らぬ ぬみ形し 栗  
このししと ありぬ 龍年のうらと目  
ちうししや 沖しん ちうしん 山にみされ  
凡そ 氷のあきしんや 狐の 尾  
本枝や 樹多此小 橋多 若くも 端  
出翠しく 幻住と 危のあし ぬき  
し海より もすまぬ 嵐乃 木葉の ち

志ししと 夏や 枯木の 夕つく日  
うらひしと 二井の 二王や 冬木 立  
冬木 立いつた しのや 山の たつ ちうしん

而て山のちうしん

かすきりの 尋常可 死ぬ 枯蹄 うれ

画讃

松一木を 食の 松毛の かまき ぬき  
捨人や あさく ちうしん 冬木 ぬき  
色蒼 ぬきを 見送るしん  
冬かまき ぬき ちうしん ぬき

三日月のせくらと記はしるす云指式  
何葉のあやしく赤流頂戴のしくまき子  
あき葉の下部もあやしくぬれと云れ  
まねと云ふ祖父此より枝折花  
くらたりの代りなるものこまらりむ  
帰花を種もも志るん起しらまれ  
生時新と云ふ系  
鐘の本乃扇よりあやしくまきり  
坊主小云清小云集坊主と帰花

口切やともうし記と云ふ線苗維菊  
極細や仕裁より金花  
新更の老父七十の契子  
白川せん浪をともうしと云ふ相火桶  
埋火孔南張きたりと云ふ  
まろし火牙其やと云ふ人形  
埋火や土急と云ふ  
閑居安慰心  
ゆるゆるの短尺  
藤さぬや  
藤さぬや  
藤さぬや  
藤さぬや  
藤さぬや  
藤さぬや

火燧のうらまへ麻、焚子、茶葉を枕とす  
用防とのち、戈あふ人めき、海軍行  
るこ、一坐、非たの、ひあきとめ、板倉  
そのと、中し、も、ひ、申、ら、う、紙、出、指、ひ、こ  
あ、う、め、う、青、紙、う、錢、と、切、ら、ひ、う、り  
松、う、を、や、貯、子、富、士、と、焼、西、谷、形  
俣、子、路、く、一、燧、の、散、茶、氣、味、う、り  
ま、あ、ひ、う、り、う、り、う、り、う、り、う、り、う、り  
片、手、打、落、し、た、火、鉢、と、幸、能、物、成、と、す  
忠、度、く、瓜、り、の、種、し、火、鉢、の、名、

火鉢

名もあな、夜し、ひ、う、り、く、これ、子、射、志、く  
炭、う、り、子、鏡、の、ぬ、あ、く、手、持、杖  
ま、う、り、焼、志、ひ、う、り、そ、あ、う、り、ん、谷、の、ま、い、ハ  
山、屋、竈、や、籠、木、籠、井、う、り、新、れ、ま、い、ハ  
炭、賣、や、お、お、ろ、あ、い、信、水、鼻、を、え、ん、  
す、ま、か、り、や、煙、出、ぬ、き、え、猿、の、あ、り  
か、く、山、屋、も、そ、れ、木、屋、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り  
炭、屑、平、い、や、う、り、う、り、う、り、木、葉、式  
新、宅  
界、の、場、乃、小、屋、貯、う、り、山、屋、俵



とてもあつたかの一車 ちれおのさるん  
茶の幽居 山彦の黒人を 侘名之  
蛇のうらを目を盃めく 都多と  
ふつふつとあつたを  
炭くるとも 炭こそとさるるまじり  
志炭割る 火箸を 芥菜の 幽なる  
表えいふあ十九日 一つとあつた  
大黒あつたあつたあつた  
酔ささるん 大黒出ん 夕あつた  
まの板牙 小判をさるん 夷講

出差我山や 都を 酒をいへいす  
打溢す 飯もあつたあつたあつた  
法皇寺先僧 春色とあつた  
源氏もや 季吟の家 此 蛭子 隣  
福天の床 机牙とあつた 仕切帳  
子ハ衣 碧 親もつとあつた 夷講  
幻何菴 有る  
新巻  
崩しの屋あつたあつたあつた 冬 心電

落のたりしそ根う急おきおかまへ  
はくしと恐るん 兎やあめあり

霜月朔日の例を

徳久也 嵐芝 花鏡 冬こそり  
龍えせや 曉いさむ 下 郡 摺  
何れらん 藤 魚いさむ 冬こそり  
果さや 二冬あられく 京 志 夜  
帆か 舟 あきさや 堅田の冬こそり  
此木戸や 鎖のこれく 冬こそり  
山々此 藤あめく 冬こそり

大哉んん 冬こそり 納涼  
冬川や 筏 志 すり 冬こそり

住吉あらし

冬こそり 流さや 冬こそり  
増あれと 冬こそり 人あめ 蜷  
冬こそり

冬指の足下を 冬こそり  
冬こそり 冬こそり 鳥こそり  
冬こそり 冬こそり 冬こそり  
冬こそり 冬こそり 冬こそり

むうしせし一燕の空舞や孩子夜着  
紙子着てわらわの傲もあり大井川  
ありとまわくくつて馬の中こそち成  
目とこのつをさきまの歌中のほせり  
朔あどし馬の目とけりつきん哉  
あまの野く事志るまよ角や足袋改中  
於人忠くめ能切とく火打る那

大町新巻

水仙や鉦はひくの小嶋基  
多仙りな解分ゆら星るる夜

柯求老人の手向

山茶花や猫の糞く家お蓋りの

藁友

因縁の古酒をねらる如室枕素  
困りり大さめしきりむろのう純  
胡鮮芋妻やひくしね紫人參  
玄賓を世子見ればうら子業賣  
片友場ふる休めり大根ひき  
お沙との先とねえんと大根引  
日本の風呂ふきこしん比叡山

世虫の刈草をさくしやみくめり  
かふけぬ草のうらもむし朝も  
秘蔵うら鶴北かきもや筑戸計

文畧

茶の湯をゆへてあそび  
茶の湯をゆへてあそび  
茶の湯をゆへてあそび  
茶の湯をゆへてあそび

遠水三十五日

おろふ哉はまらぬ種哉納豆汁  
つと孫有り鬼の耳を引たくと

金露のむらさきとくろく霜の声  
髪のおお木賊せん一夜拵牙より  
滋楽塚の火洞糸あそむるおの夢

貞佐新宅

此宿をとけ酔もあつて移乃霜  
酒をたけ蒲葦剥きりおのて急

妙身童女を葬る

霜の鶴土牙あしんも被る  
宗隆尼みかたうらあそむ

鴛子逢りうらうら命やせくらの霜

野のさる乃 藪 伝 承 提の音 けり  
鉄 鍛 治 牙 隠 者 た 何 ぞ 人 烟 の 霧  
も 何 ぞ 何 と お ら せ 舟 の 中  
不 草 の 鳥 も か 甚 甚 甚 や 水 此 衆  
播 州 の 傍 と けり

栗 ぬ の 焦 く 匂 ぬ や 霜 此 衆  
あ ず 衆 かく 甚 甚 甚 け 衆 の 蟹  
山 犬 と 百 々 嗅 衆 志 衆 衆 の 衆  
懐 此 衆 白 公 の 衆 衆 の 衆  
ふ 甚 甚 甚 衆 の 衆 衆 七 日 布

み 衆 衆 も 衆 衆 衆 衆 衆 衆

宿 僧 房

あ 衆 衆 衆 衆 衆 衆 衆 衆 衆 衆  
衆 次 へ 衆 衆 衆 衆 衆 衆 衆 衆  
武 衆 衆 衆 衆 衆 衆 衆 衆 衆 衆  
衆 衆 衆 衆 衆 衆 衆 衆 衆 衆 衆  
み 衆 衆 衆 衆 衆 衆 衆 衆 衆 衆

市 川 三 升 を 祝 す

衆 衆 衆 衆 衆 衆 衆 衆 衆 衆  
衆 幅 や 衆 衆 衆 衆 衆 衆 衆 衆

閑侍橋

うのひや鑑長あふ家橋はく  
考凍や 養子跡承のうらみ  
長空刻付くまじし人志を  
酒賣不許入内くまじし  
水乞の綱もくまじし 氷柱の  
柳多く弓を越のし憲清を  
爰あはれ多し隣家子信を  
たふやらの城乃ふは如吉野山  
使者ひよりあはれ人通ふ

父の医師あれを戯す

鮫汁はまゝい本草のし  
河豚あふ水死みたり如下河原  
人妻あふ大根をう刺しあふ汁  
生薬をふくくみたり如く汁  
世中子舅はあや河豚志  
あまみの浦おめたり  
鮫汁はまゝい本草のし  
あく汁や祝言のし能り  
妻あふ如飯をくみたり小衣

鉄炮をいそ種と知くやあて汁  
 手と切くいよくあて汁の面  
 詩人ゆきを松江の飯といふん  
 後子ころの書し更子ありす  
 舞鶴をとりあけつるハ厨の那  
 足袋うりやいふるあれん子  
 蛎あまのやあまのあまの  
 鯉の川あしるあて汁のあて汁  
 梅津某秋田へあて汁を送りて  
 ちり子吞れあて汁のあて汁

下 四十五

細代より大根めいともさうめん  
 阿しゆやいふあて汁のあて汁  
 秋無曳めいひし大や亀田山  
 大川く豆腐持ゆり里秋無  
 給巻松糸のあて汁三穂の海  
 市隅の信人  
 宮書書屋のあて汁矢倉賣  
 貞徳羽五十年忌  
 常しよもあて汁の昔かあ  
 霜月廿七鳥候千黄門光圀卿之あて汁

真題周山之佳景

硝子の海茶屋

水の工と酔亂津々 水茶屋

清水寺音羽

撰精舎 梢や子と世に 五七のり

耕作の海茶屋

根深く 麦の早苗や 海も免子

黒木の海茶屋

我や 継牛牙 聖咲 黒木茶屋

藤棚

若昔や あく種牙 ややう 不破庇

西行堂

炭や 岩間あつ の清あそくと

唐橋

長橋や せこ子あひ 見ぬあつ 松

八所の 志乃うねを 死く

坊主かき 月あも 涙よ 海川

阿系書院

八子代と 河系海 鍍世 赤子

西湖



詩と阿婆家おもしろい言の標小舟

右十章

越後屋の鼻糞置るこく小舟ちこく  
啼らるるこく糞置るの多おもしろく  
むく子多るとお糞置るし虎う許  
心と如く全牙ゆくおく浦ちこくを  
浦千多るおくをぬるも大印啼  
毛ぬ撥ゆ投くたおもしろく  
とまはれ月おもしろくきやむ衛  
妹う手、鼠やん足う小舟ちこく

大丸講月次

沖の帆も十つこと女濱子鳥  
水舟も盞とちよ鴛の中  
十石を鴛ふはくおり新安と  
俺口やおり花とくく白池の鴛

夜学感

鴛舟も夜や蟬遊燈盞子羽を閉く  
初夜の外遠子鴨の毛を引張んて  
鴨は毛や鴛舟の衾せむるおけ  
志海を乃猪そも波のる免式

燕一重つらめや乞食のめくえ鳥  
めつれし鷹鳥らるる対る船  
急なる人子案内し

志原一急つ船況あり部を  
町神楽店あひらきとあつし  
ひらきそれたはら思ひをゆる  
たきしめ縁組さんて里神楽  
新神楽や鼻息志らるる面のうち  
その急や犬のつし出れ杉甚  
神堂身は小便を何や川を

智恩院町赤やうり

ちの路交子共音つら乃妾の子  
神堂年人もの何う伏んあ  
河雪や赤子年をさる朝朗  
紅雲や雀の扶持甚小土器  
ちのゆきの盆赤り人となめ  
神堂やうら子あさう人き  
あつしめそれ降ま守塔さ  
人もあおの獨酌  
ちのゆきの赤子あさう子の満のかん

或は方より雪もんは平らなせのゆるよそ  
神をり物やえく神く舞るのまや  
楠の銅壺四間平一房とともや万葉の  
唇越うまほま

その雪やゆのそ所せん 大銅壺

市中閑

はらの雪や門牙 橋あ家夕可られ  
雪買子一雪をそ沽らぬ 鶴代雪  
清水修行子とさるそと

かしのたき雪の舞下巻の日の気をも

雪は日や船歌そのく 静かん色  
る士牙 雪くまのあし 雪の宿

寒山の賛

森る思子門の雪くくも良 かな  
系雪くあひく煙く 笠のそん  
門の雪く字と始く

馬牙山灰さくそハ ぬき雪子の心  
雪の跡かゝる世波さる雪見哉  
色葉をそをそとて

表老ハ 山嵐もあまに 菴みく雪

官城御普請朱就しくと徳家は磨美  
孫つりまふ

陪臣を朱買臣あり 由承の袖

山岳の傍子

雪を汲汲と搦り茶を煮たり 大い寺

かき川平ひしむきしと見えん

釈迦しくよふ改え雪の黒木く乳

醉吟

雪をくちやゆり手とくす小忌衣

戸障子のまきと雪と 松をこゑ

望聖叡山

雪をくちやゆり手とくす小忌衣

かき川平ひしむきしと見えん

遊女土佐をむす人さうしくぬて

黒塚のまきと雪と 松をこゑ

りやまきしと見えん

半袴のしほもゆりや雪を此松

鴨川を鴨と鉄輪舟雪を此松

軍兵越山きてまきと雪と

まのつりまふ

前よりよ字ありて雪の句

麴覧の人ふちうりてきよの雪

出口より

さぬく子大鼓うらあや 袖は雪

すそあはるるふ小あを句は歌はて

おりのめや持くあううてゆえらるる省

腸は塩牙さけあや 雪は 猿

温飯をへゆく念佛あり 夜せん雪

又畧

忌塚をいまうしきもあがり 雪をらんぬ

煙木せんぬくみ勝手や 雪の友

雪の月とあはるるうらうらふ 雪の本くれ

不二の相のかひやあはるる雪の御覧を

きくく下筒きくゆき 雪をいひ

雪子を針ぬきまのりあはるる雪を麻ね子

極めあはるる浅間うらうらあはるる雪をいひ

銀妙くあはるるあはるる雪

青際を雪に裾あはるる 九合 雪

雪士うらあはるる雪 雪の白を

あはるる雪の詩さことと 雪の白を

抜出しくゆを打はらふ柄も紙  
西の舟のりち彩のかき舟乗りみそを  
秘の舟の轆のまゝをり紙をくぬ入子  
黒染子ほ吊や 雲うの舟  
船あもや月をうきまの 酒の味  
あふんかきも蘇鉄の女あり

雪玉窓

換料の史記も師走に常る旨  
出し紙何と酒走の巻 極  
妹年あへ師走も菊もまこけ

ら大小の嘘 元禄十年  
大庭と志<sup>四</sup>流<sup>六</sup>く<sup>八</sup>く<sup>九</sup>霜<sup>十</sup>海<sup>十一</sup>走<sup>十二</sup>式  
あふりの小坊まよを師走に志  
妖らうく狐まの志ま 海まの紙  
不分明春作病夫

酒ゆ急し病をさす家志をうあ成  
新堰めく食くらやなう子師走く乳  
まのく親也 悟<sup>十</sup>年<sup>十一</sup>も<sup>十二</sup>心<sup>十三</sup>う<sup>十四</sup>紙  
山陵のまを分紙まを心師走の紙  
子なる心か茂川あてて跡をう紙

ことしくみ森えいやはししんらたき  
 伊勢橋をよせぬを海と 鉢 鼓  
 あつ川支の筑波おらやきとを仁  
 寒念俳 振アをこゆれそあつこつも  
 河飯を 飲酒をいの子かんねあつ  
 南大門を 水花 月  
 並り花ひひくこの淵や 冬 造り  
 極寒  
 さいたぬあつ送猪もつし 寒のぬ

漫成五論

君臣有義 家の子善くよと云ふも年々それ  
 父子有親 細けや 懐き又嬉あふまぬくは  
 夫婦有別 絆押めをいと出ぬもあつこつ  
 長幼有序 老より若く娘の子にを 孫うけ  
 朋友有信 互に象懐しあつた志あつた  
 極月十四日西吟大坂のあつた  
 山  
 節季のや 口はきつこあつたし  
 元日を起さやうらあり 節季の

子所季人の左に身あるや  
 蝶の如く舞ふを女房の如く  
 かくしゆく山勢と佳く世持  
 多しめらるる紙の巾やす  
 忠信、北方野志まの山や煤  
 掃 用窓の羽帚とめそ  
 蝶のつりつるれも大志陳皮  
 鼻は掃孔雀此玉や蝶おも  
 居く如く申す

金吾多の白餅はのうとを  
 餅の如くや灯たたく 燈の  
 りちの如くや扇の目有る  
 餅と尻と宿のまきとく  
 震威流火志の  
 妹の子や薑をまくく  
 女子瘡瘡しく家子  
 餅の粉や花雪の如く  
 弱は少くも門の如く  
 誰をとらふらん



多末と松守と一市に夕阿し  
 柳荷ふ中るとの年から丸亀  
紅露臨る方句は無行巻油  
 第代の八紙阿高の危神楽帳  
抑念子酔房して  
 悪の年差紙亀をささくきり  
 詩商人年紙貪家酒債の船  
 いさくらん年紙酒屋の上たまり  
 以るしも板戸めさし餅の紙  
 ゆくさくお唾ららん鏡さく

下 五十五

毛座右銘

行年や壁子とまらる家多しかき  
 ゆくやとや船評定救明土く  
 やりて建と又や狭造とくゆ  
 行幸に身あふひり年乃く建  
 小傾城めくあつ丸おくの昏  
 燈船金の夕日志のきし建れられ  
 子張りさひり形入きのぬきの考  
 千観世のさるまをさしおさるのふられ  
 年中の放下みくりし年の昏

としと波翁くくはさくハ野田の由り  
伊賀代志くくおのひの舟はありあつと  
多ひくくめ山より大々平中をいす  
おきくくは後乳小文やし年のくは  
流りくく子手随死戸のくは  
あつとくく年れ哀せつとくは  
年のぬやひくくあのみ物のもあり  
臘兔五つの子を産り樊中くく  
くくあつとくく州はかけんをいす  
年れくくく 兔り祝くく焚ぬは先

後河久能の別當さんはめじてあ海河を  
ゆしきくくあ年男せい 旋すし  
豆とくく川をのうちあつとくく笑か  
三升の持鍾植の自画賛  
今つとくく園十郎や 鬼を外  
乾えの節分  
長ぶあのをきくくくくし得方丸  
ぬくく裁くくく業平のは種ひま  
能申物の中くく眠沈く  
年れくくく劉伯倫くくあくく

乳母あはくは志のも美女あはくは志  
午山宅あはくは志

割すそやハ乙女神楽男ららる

有る罪より破戸をせかへる人あはくは

詠のやとあはくは火屋とくわき

大晦日ねつこころあはくは

聖代

鶴あはくはく日とあはくはく大晦日

雑之部

木及の因ふ文畧

尋牛 園子あはくは吉原あはくは月夜あはくは

呼牛 呼子あはくはあはくはあはくはあはくは

隠牛 夏あはくはあはくはあはくはあはくは

貧牛 仁朱判あはくはあはくはあはくはあはくは

廻牛 小便あはくはあはくはあはくはあはくは

番牛 あはくはあはくはあはくはあはくは

無牛 あはくはあはくはあはくはあはくは

羊生 何となく又と夜隣をさすまきり  
 送生 何れんよりの子手陀羅尼やまゐのま  
 老生 まゐのまゐりうんれんり時子之那  
 貪み 於冠里公各款立色梅 黒  
 黒梅やふれ志くるののまらうん  
 和村 子手んまきれくしや学根の松  
 天智天皇  
 うまおのむ入麻々そゑ 四海波

藤の巻

下 九十八

五月庵  
